

イヌイットの版画

版画の歴史は古代中国まで遡ることができますが、カナダのイヌイットの間で版画が行なわれるようになったのは1957年以降のことに過ぎません。伝統的に、イヌイットの視覚的芸術家はその創造力を発揮してきた方法は、石や動物の骨、象牙などの自然の素材に図柄を刻んだり彫刻を制作したり、衣服に美しく複雑な模様を縫い込んだり、手の込んだタトゥーを顔や体に施すことでした。描画の道具や紙といった版画に欠かせない材料は、カナダの北極圏地域では、ヨーロッパの探検家や宣教師がやってくるまで、知られていないものでした。

近代的な、プロとしての版画制作には、専門の技術と道具・設備が必要です。それは、1948年に北極圏に移住したカナダ南部出身の芸術家、ジェームズ・ヒューストンによって初めてケープドーセットに紹介されました。ヒューストンは、ケープドーセットでこの新しい文化的表現を試すことに熱意を示す人々と出会います。1959年までには、5人の初代イヌイット版画家、カナンギアク・プートウーグック、イヨラ・ギングワチアク、ルッカ・シアック、イージヴドルク・プートウーグック、オスイトク・イーピーリーが、ウェスト・バフィン・エスキモー協同組合（地元ではキングート協同組合と呼称）の傘下で版画を制作するようになっており、同組織はほどなくして「ケープドーセット・スタジオ」として国際的な名声を獲得します。

当初から、イヌイットのアーティストたちは、版画でイヌイットの神話や歴史、そして北極圏の動物たちを表現するとともに、伝統的生活習慣と変化しつつある文化的・社会的状況を記録しました。その作品は、世界中の芸術愛好家の注目を集め、ケープドーセットやその他いくつかのイヌイットコミュニティの経済の柱となりました。

世界の多くの地域で、版画には木板の表面に図柄を浮き彫りにする木彫を行いません。けれども、樹木のない北極圏では、木材は素材の選択肢として実用的ではありません。特に、極北地域への交通手段が非常に限定されていた初期の時代にはそうでした。そのため、イヌイットのアーティストたちは、身近にあった素材に目を向け、初期の数年間、南から運ばれてきていた床材のリノリウム・タイ

ルの利用を試みました。1959年までには、地元の緑色岩採石場を見つけて利用するようになっていました。緑色岩は、イヌイットのユニークな「ストーンカット（石彫）」版画を制作するのに理想的な素材でした。

ケーブドローセット版画スタジオでは、ひとりのアーティストが図柄を描き、別のアーティストが図柄を石に刻んで紙に刷ることも珍しくありません。初期の版画作品には通常2つの署名が付けられ、上下に並べられています。上の署名が描画アーティスト、下が刷り師を示し、一番下にケーブドローセットのマークがあります。

木を彫った場合でも、石やリノリウムを彫った場合でも、版画作りの工程は本質的には同じです。元の図柄を浮き彫りで刻み、表現する図柄が素材の最上部の表面となります。その後インクを表面に付け、紙をインクの上から押さえ付けて、図柄を写し取ります。場合によっては、出来上がった版画にステンシルを用いて色を追加します。その場合、ひとつひとつの色について、色を着ける形をしっかりと紙またはマイラーフィルムから切り抜いて、残りの紙やマイラーフィルムを版画の上に置きます。その後、ブラシで上から色を塗り、ステンシルフィルムの開いた箇所を通った色が版画に着くようにします。現在では、リトグラフィーやエッチングなどその他の版画技術もケーブドローセットで使われています。

1950年代の協同組合としてのマーケティング手法に従って、ケーブドローセットや他のイヌイット・コミュニティで制作された版画のほとんどは、個人のアーティストによる販売はせず、コミュニティが発売する年次「コレクション」の一部として売られています。ケーブドローセットは1960年以来毎年、年次コレクションを制作しており、イヌイット版画の震源地、さらには、世界的に知られる芸術制作中心地のひとつとしての地位を保っています。

今日、イヌイット版画作家の新しい世代が台頭してきており、半世紀前に始まった画期的な物語に、刺激に富む新しい一章が加わりつつあります。